高木山本 全日本準V

杖道 全十勝剣連勢が活躍

全十勝剣道連盟杖道部会（鈴木清志部会長）の3選手が全国、全道大会で好成績を挙げた。第48回全日本大会（10月17日・名古屋市、全日本剣道連盟主催）五段の部で、高木誠が細沼哲也（札幌）と組んで準優勝を遂げた。四段の部では山本直人が古野聖児（札幌）と組み同じく準優勝。第32回道大会（10月31日・北海きたえーる、道剣道連盟主催）の初段以下の部では、市川美智子が頂点に立った。山本は四段の部を制し、高木は五段の部で準優勝だった。（新井拓海）

杖道（じょうどう）　2人一組で行う形武道。長さ128㌢の杖を用いて、太刀を持った相手を制圧する。杖と太刀を交代して互いに演武し、気勢や姿勢、打突の正確さや打ち込みの強弱、間合い、礼法などを評価。2組が同じ試合場で同時に演武し、3人の審判の多数決で、2組どちらかの勝敗を決する。

道大会初段以下は市川制す

コロナ禍の素振り ぶれない軸つくる

五段の部 高木

難しい状況でも稽古を重ねた高木誠が、五段の部で準優勝を果たした。

例年なら大会前の4カ月は月2回程度、ペアを組む相手との練習の機会がある。コロナ禍で練習が制限された今回は9、10月の計3日間のみ。それでも高木は、自宅でも素振りに取り組み「自分の姿をつくった」と、できる限りの稽古を積んだ。

準決勝は2―1と小差の結果に、「判定の旗が割れるということは、（対戦相手と）互いに大きな失敗はない。これといった勝因を挙げるのは難しい状況だった」。コロナ禍でも続けた努力が、相手とのわずかな差を生んだ。

結実したのは、課題だった逆手打ちの場面。両手で杖を握った時に、前に出る手の向きを本来と逆に持って相手の太刀を払う部分だ。大会前に続けた素振りが、高木の体の軸を安定させた。ぶれのない動きで、相手の太刀を的確に払い、流れ良く演武した。

高木は過去、同大会の二、三段の部でも入賞。2018年には、四段の部を制した経験を持つ。

以前はスポーツの経験はなかったが「知らないことをやってみたい」と、杖道に打ち込んで10年以上。「今後は技の意味を深く考えて練習していきたい。五段の全国優勝を目指して頑張りたい」と笑顔で誓った。

㊤全国、全道大会で好成績を収めた全十勝剣道連盟杖道部会の（左から）高木誠、市川美智子、山本直人
㊦稽古に励む3選手

技の深み「納得」

四段の部 山本

四段の部で準優勝の山本直人は「力を出し切った。納得の結果だった」と充実感をにじませた。

準々決勝を3―0で制し、流れ良く臨んだ準決勝も確実な手応えがあった。杖で相手を突く場面では、的確に相手のみぞおちを意識。声を出して気合を入れる部分で勢いを増して演武し、「稽古通りにできた」と3―0で勝利した。

大会前の練習では、コロナ禍で難しい状況もあったが全国大会に出ることを心に刻んで、モチベーションを維持。本番で自分が演武する姿を思い描くことで、士気を上げ続けた。

2018年には、全国大会の三段の部で最高位の優秀賞を獲得。四段では初出場となった今回も好成績を残すなど、着実に力を付けている。

「以前より、技の深みや、残心を意識してできている」と、山本は自身でも成長を実感。強弱を付けた流れを考え、技を出した後に気持ちを切らさないなど、手応えを得ながら努力を積んでいる。

今回、力み過ぎて動きが硬くなる部分は、今後への課題になった。「四段の部でもう一度チャレンジして優勝したい」と、次を見据えた。

自分との闘い 意識

市川

全道大会初段以下の部を制した市川美智子は、大きな成長を果たした。昨年の全道大会では初戦負け。今回は、稽古熱心な姿勢が結果を生んだ。

もともと、居合道にも取り組んでいた市川は、2年前に杖道を開始。全体での稽古以外にも、自宅では「変な癖が付かないように、先生に言われたことをしっかりと意識した」。力み過ぎずに自主練習にも取り組み、日常生活でも正しい姿勢を心掛けた。

「自分との闘い」と臨んだ決勝。背筋を伸ばして堂々と「力まないことが一番」と、基本に忠実に演武して優勝を果たした。

「力んだ時には技が荒れる。自分を見詰め直すには杖道は最適。心が反映される」と市川は競技の魅力を語り、今後も稽古を重ねていくつもりだ。

毎週日曜に練習 新規会員を募集

全十勝剣道連盟杖道部会は会員を募集している。練習は毎週日曜日午後6時から帯広の森体育館で行っている。問い合わせは事務局の田村さん（090・9435・6442）へ。

バスケット

白樺は男女とも第1シード決定

高校新人戦地区予選

高校バスケットボールの第5回全十勝秋季大会（帯広地区バスケットボール協会主催）が20、23日に帯南商高、帯農高、帯柏葉高の体育館で開かれ、道新人大会帯広地区予選会（12月12、18、19日）のシード順が決まった。第1シードは男女共に白樺学園。男子15チーム、女子9チームが出場した。

なお白樺学園男子は、全国高校選手権（ウインターカップ、12月23日開幕）の「5日前からの対外試合禁止」事項に抵触する可能性が大きいため、同大会に出場しない。救済措置として道協会は道新人大会に帯広地区第1代表として推薦した。

【男子】◇第1～4シード決定戦
白樺学園 153（29－14、34－16、33－16、57－47）帯三条
帯大谷 85（20－23、21－16、21－25、23－77）帯工
帯柏葉 107（21－13、30－32、29－27、27－59）芽室
帯北 75（21－15、14－14、20－19、20－61）帯農
帯緑陽 108（26－19、30－14、25－9、27－49）広尾
足寄 51（5－7、14－12、18－17、14－48）清水
足寄 83（18－14、24－15、21－14、20－53）鹿追

◇第5・6シード決定トーナメント▽1回戦
白樺学園 67（20－21、15－18、12－14、21－63）帯南商
帯大谷 92（20－21、24－21、27－21、21－66）帯三条
帯農 75（16－10、23－17、20－17、16－60）帯北

▽準々決勝
白樺学園 133（25－16、29－7、36－9、43－48）帯柏葉
帯緑陽 84（15－8、29－9、23－9、17－32）足寄
帯北 59（16－24、19－6、16－8、8－47）帯柏葉
帯北 118（24－10、34－13、33－14、37－52）帯緑陽

▽決勝
帯北 198（52－10、42－15、45－5、59－9）帯農・士幌
帯柏葉 108（32－9、18－16、23－6、27－5）幕別清陵

▽準決勝
帯柏葉 123（28－8、27－4、34－11、34－11）帯農
芽室・幕別清陵・音更・広尾・帯緑陽 71（8－16、20－18、27－7、16－15）池田

▽決勝
帯柏葉 133（25－16、29－7、36－9、43－48）芽室・幕別清陵・音更・広尾・帯緑陽

※シード権獲得チーム（丸数字はシード順）＝①白樺学園②帯大谷③帯三条④帯南商⑤帯柏葉⑥芽室・幕別清陵・音更・広尾・帯緑陽

【女子】◇第1～4シード決定戦
帯柏葉 108（32－9、18－16、23－6、27－5）幕別清陵
帯北 198（52－10、42－15、45－5、59－9）帯農・士幌

▽準決勝
帯緑陽 84（15－8、29－9、23－8、17－32）足寄
帯北 59（16－24、19－6、16－8、8－47）帯柏葉
帯北 118（24－10、34－13、33－14、37－52）帯緑陽

▽決勝
白樺学園 67（20－21、15－18、12－14、21－63）帯南商
帯大谷 92（20－21、24－21、27－21、21－66）帯三条
帯農 75（16－10、23－17、20－17、16－60）帯北

※シード権獲得チーム（丸数字はシード順）＝①白樺学園②帯大谷③帯工④帯三条⑤帯北⑥帯緑陽

葵塾勢9選手が好成績

空手道 丈夫カップ／道交流試合

小学5・6年男子初級 佐藤（糠内小）優勝

空手道の葵塾の9選手が、二つの全道大会で入賞を果たした。第23回丈夫カップ（10月24日・札幌市北海きたえ～る、道空手道協会主催）では、小学5、6年男子初級で佐藤綾人（糠内6年）が優勝、同4年男子30㌔未満上級で佐瀬翔太（栄4年）が準優勝、同3年男子上級で島田健吾（大空3年）が3位、同1、2年女子で吉井葉結来（はゆら、木野東2年）が準優勝の成績を収めた。同1年男子上級で大友琉生（るい、更別1年）、同1、2年男子初級で佐藤天音（あまね、糠内2年）、幼年男女で森田統吾（すずらん保育所年長）がそれぞれ優勝した。

第32回道空手交流試合（同・同、全日本空手審判機構道地区本部主催）では、小学5年男子初級で宮本一颯（いぶき、若葉5年）、同2年男子初級で新津好誠（こうせい、木野東2年）がそれぞれ優勝した。（新井拓海）

全道大会で上位入賞を果たした葵塾の各選手。（前列左から）新津好誠、吉井葉結来、大友琉生、森田統吾、（後列左から）宮本一颯、佐藤天音、佐瀬翔太、島田健吾、佐藤綾人

多彩な攻め光る

佐藤綾人

得意の前膝蹴りで決勝を判定勝ちした佐藤綾人は、「後ろに引かず、押されないように痛くても前に出続けた」。得意技だけに固執せずに、上段回し蹴りを織り交ぜて相手の不意を突くなど多彩な攻めも見せた。前に出る攻撃を今後さらに強化し、昇級も目指す。

課題は試合前

佐瀬翔太

佐瀬翔太は初戦、相手の上段回し蹴りに対し、回り込み横蹴りを狙った攻撃などで判定勝ちし、「相手より動けた」。悔いが残った決勝の課題は試合前のアップ。今後は、一度、息を上げ切ることを徹底する。次戦は「自信を持ってまず1回戦を突破する」と意気込んだ。

隙見せずに優勝

大友琉生

構え方も強化して臨んだ大友琉生は、優勝に笑顔を見せた。向き合った相手に正面から体を向け過ぎないことを意識して、より隙のない立ち方を心掛けた。9月の全道大会で敗れた悔しさも忘れず、「気持ちで勝つ」と強気だった。今後はより安定した技を磨く。

突き稽古の成果

島田健吾

島田健吾は稽古の成果を試合で発揮した。大会前には突きを重点的に強化。以前負けたことがある相手と対戦した準々決勝では、突きに加え、蹴りも組み合わせて攻撃し、判定勝ちで雪辱を果たした。今後、「突きを決められるように頑張る」と、力を込めた。

回り込み決定打

佐藤天音

佐藤天音は初戦を一本勝ちし、続く決勝でも快勝。相手の横に回り込みながら、突きを狙いつつ足を蹴ることで相手が転倒し、判定勝ちした。大会前は、技を出す時の道着のキレのある音まで意識して技を磨き続けた。「次も優勝を目指す」と力を込めた。

上段決まり勝利

吉井葉結来

努力を重ねた吉井葉結来は、「年長の時は銅メダルだった。少し強くなれたと思う」。大会前には家でも、蹴る足をより上げられるように稽古を積んだ。初戦では上段回し蹴りが決まって勝利。今後は「走り込んで体力もつけたい」と、さらなる高みを見据えた。

前に出続け制す

森田統吾

森田統吾は「（対戦する）全員を倒す」と、大会に臨んだ。大会前の練習では、その気持ちを表すかのように、下がらずに前に出続けることを意識。決勝は前蹴り、中段突きで攻め、相手の反則で勝利した。「家でも練習を頑張りたい」と、今後も努力を重ねる。

刺すような攻め

宮本一颯

人生初の優勝に宮本一颯は、「先輩と先生の教えがあった」と、周囲への感謝を忘れなかった。「刺すように」と、突きと下段蹴りで攻め、決勝を判定勝ち。大会前の練習では、隙のない構えも強化した。「新しい技も頑張りたい」と、今後も向上心を持ち続ける。

速く力強い突き

新津好誠

新津好誠は人生2回目の試合に緊張しつつも、冷静に戦った。鍵は初戦。力が強い相手に苦戦しながらも、落ち着いて回り込みながら、速く力強い突きを心掛けて判定勝ちし、ヤマ場を乗り越えた。「もっと大きな大会でも優勝したい」と、今後も技を磨き続ける。

帯広楽走会 今年も完走

納会ラン 22人が汗

ランニング愛好者でつくる帯広楽走会（高西秋雄会長、会員29人）の納会ランが14日、帯広市内の自由が丘福祉センターを発着点に行われた。

22人が参加。高西会長が「健康で走れることに感謝し、今年最後の行事を楽しもう」とあいさつした。準備体操の後にスタート。無風の穏やかな天候の下、参加者は3㌔、8㌔、12㌔の三つのコースに分かれて心地よい汗を流した。終了後はゲームで懇親を深め、近くの温泉に入るなど体をほぐし、疲れを取った。

同会は、毎週日曜日に同市内のグリーンパーク付近を走る早朝マラソンや、元旦マラソンなどの事業を実施している。

今年最後の行事の納会ランを楽しむ参加者